

ICWES14 参加報告

7月14日～18日の行程で、ICWES14が開催された。
今年はフランス北部の街リールでの開催である。
私は初めてICWESに参加させていただいた。
フランスの地を踏んだのも初めてである。

ICWESでは、各国から女性技術者が勢揃いして、オープニングから華やいていた。

会議は、オーラルセッションとポスターセッションといった日本での学会発表と同じようなスタイルであるが、圧倒的な女性の数で、学会とはまた違った雰囲気を感じられた。

日本からは、諸先輩方がそれぞれの得意分野から発表されており、たいへん勉強になった。



写真1 ポスターセッション会場の様子

私にとっては、慣れない英語と、全く慣れないフランス語の中で、知っているわずかな単語をたどりながらの参加であったが、会場には、世界中で頑張っている女性技術者の元気が感じられた。

会議そのものの発祥が、女性の地位向上に端を発しているからだとは思うが、セッション区分にジェンダー発表が目立っていたように思う。本来、技術者としての立場では、ジェンダー問題を表面化するのは、あまり意味を持たない気がする。

女性が集まって、ジェンダー問題を語り合うことより、本来の自分たちの仕事や技術を語り合う方が実り多いと思う。

その点では、日本からの参加メンバーの発表は、技術的要素がきちんと紹介されていて、なおかつ女性的な細やかな視点も含まれていて、拝聴していて心地よかった。

しかし、これも自分たちの置かれている立場が恵まれているからこそできることなのかもしれない。

日本でも確かに、まだまだ男社会であることには変わらないが、他国には、もっと遅れている地域が多く存在しており、まだまだ女性の地位向上を訴えていかなければならない現状があるのは確かである。

本当に男女の区別なく、純粋に目的や目標を達するための仕事や役割が認められるようになるのは、男女が相互に男女という言葉に左右されない意識を持ち得た時に訪れるのだろうと思う。

そして、この意識が生まれるのは、男女の差ではなく、明らかに人間の差によって得られるものだと思う。男性も女性も、その前に区分される「人間」でありたいものである。

そしてなおかつ、女性に生まれた限りは、女性としての感性や特性も大事にしたいと思う。

会期中には、会議の開催されたリール以外にもベルギーのコルトレイク、ブルージュにも立ち寄った。

古い街並みは、その歴史の重みと共に、その地の生活文化の豊かな香りを醸し出している。

ブルージュは、観光地でもありながら、一つ路地を入ると閑静な住宅街になっており、生活そのものが文化や歴史と融合した安心感を漂わせていた。

都市計画や地方計画を専門とする私には、この古い街並みの景観もさることながら、この地の人々が、この景観を守り慈しんできた「心」を感じられたことの方が学びとなった。

日本には、日本の心がある。日本の風土に馴染む美しい心の風景があるのである。

いつも海外を訪問して最後に行き着くところは、日本の心を大事にしたいと思うことである。



写真 2 ブルージュの住宅街

4日間の会議が終了して、パリでの自由行動では、久々にドイツに住んでいる娘に再会した。娘は相変わらずの能天気で、いつまでたっても私の悩みは尽きない。

それでも異国の地で息をしてくれただけでも、一安心である。

久々の再会で気を良くした娘は、お酒に酔っぱらい、最後はいつものことながら親子喧嘩で幕引き……。喧嘩で締めるのが私たち親子の習わしのようになっている。それでも本人達は、気にもしていない。

しかし、それを知らずに同行して下さったMさんには、本当に不愉快な思いをさせてしまい申し訳なく思っている。(本当にごめんなさい。)

斯くして6泊8日の旅行は終了したが、久々のゆっくりした時間を異国で味わうことができ、多くのことを感じ、学ぶことができた。

女性技術士の会メンバーとしては、ほとんど何のお役にも立てなかった私だが、温かく接して下さった諸先輩方、そしてご同行のお母様方を始め、皆様に、感謝の気持ちでいっぱいである。本当にありがとうございました。